

各部圖興復、當在至此城時、乃書於駐北庭府下、失一」と曰へるに賛同せざるを得ず。

### 三 回鶻王畢勒哥の招致

本文によれば、大石は出走の翌年二月甲午、旅を整へて北庭を發し、先づ書を回鶻王畢勒哥に與へて直ちに之を歸服せしめ、更に西して遂に尋思干(サマルカンド)に至りしといふ。余は前項に於て大石が北庭に至りしは天會七・八年の間なるべきを論述せり。さればこゝに見ゆる回鶻招致のことはもとより此の年より後のことならざる可らず。今これについて考ふべきは、此の回鶻王畢勒哥なるものは何處に據りし回鶻なりしかの問題これなり。此の部族は外蒙古の根據地を去りてより後は、一部は高昌に據りたれど、一部は別に南の方流沙を隔てたる甘州・沙州・肅州等の地方にも據りしものなるが、高昌のものは更に輪臺・龜茲の地方をも占有して遼・宋・金等と交通し、南方甘肅地方のものは、宋の景祐三年(一〇三五、通鑑長編の辨に據る)西夏の李元昊の爲に征服せられたりと雖も、然も尙ほ金の天會五年(一一二七)に及びても沙州の回鶻活刺散可汗なるもの、金に入貢したりしこと見ゆれば(金史太宗本紀)、當時も其の勢力絶滅せしには非ず、更にまた九世紀の半頃より興り、十世紀の終りには吹河畔ベラサグン(Belasagun)を根據地として、廣く東西トルキスタンに勢を占め、大石の侵入に當りて之に其の國を譲りしイレク・カン(Ilek Khan)家、もしくは近世の學者のカラ・カン(Kara Khan)家と稱するものも、亦た回鶻族なりしが如し。但だ之が果して回鶻族なりしか否かについては未だ全く疑ひなきに非ず、主として此の王家の史跡を紹介したる Grigorieff 氏を初め Lerch 氏等は之をカル、ック部族と考へたれど Deguignes, Fiähn, Reinaud, Bretschneider 氏及び Radloff 氏